

正方形の紙を折ると、長方形になり、三角形になり、一回り小さい正方形になり、凧型になり、菱形になり、次第に何とも言えない形になっていって、笹の葉のように細長い形から、細長い五角形に角が生えたような形へ、頭を折り、そして広げれば鶴になる。

何度もくり返せば当たり前になってしまいが、一枚の紙がこうして形を変えるのは、魔法のようにも思えた。魔法のようだと思った次の瞬間には、また下らない紙クズを増やしてしまったと後悔の念を覚え、その次の瞬間には新しい色の紙に手を伸ばした。

江里口サトルは、放課後の美術室で、ずっと折り鶴を作っていた。

別になんでもよかった。時間をつぶせるならなんでもよくて、これといって得意なことのない自分にも出来るものはそれくらいだった。最初は美術室で余っていた折り紙を

使った。その内に文具店に行って買い足した。五月の連休明けから折り続けて、ずいぶんな量になったそれらは、乱雑にゴミ袋に溜めてあった。捨てもしないし、場所ふさぎだったけれど、美術教師は処分せよとは言わなかった。当然だ。なんのために鶴を折るのか、そう問われて曖昧にはぐらかしているうちに、美術教師の頭の中でサトルは「入院している祖母のために千羽鶴を折っている」という認識で定着してしまった。いずれ祖母に送るものを、教師は捨てるとは言わない。そうして折り鶴が二袋溜まって、三袋目も半分程度溜まった頃、そいつは突然現れた。

そいつの名は「江里」といった。高等部の制服を着ているから、高等部の生徒なのだろう。高等部の生徒がわざわざ中等部の美術室へやってきた理由について、開口一番、彼女はこう言った。

「とってもきれいな歌声が聞こえたんです。君の歌声だったの？」

いやいや。断じて歌っていない。鼻歌も歌っていないし、

ましてや教室の外に聞こえるほどの音量なんて絶対出してない。ただただ黙々と折り紙をしていた。息を吐く音はあつたかも知れないが、声は出してない。歌なんて、歌っていない。

しかし、彼女が聞こえたと言っただから、聞こえたのかも知れない。もしそうだとしたら、サトルは自分が歌っていることすら気づかないほど正気を失っていることになる。いや、いくらなんでも、そこまで追い詰められてはないだろう。ならば可能性としては、彼女の耳か、もしくは頭がおかしいことになる。

「私、一之江ルリ。君の名前を教えてください。」

美術室の入り口にいた彼女は、いつの間にかサトルの目の前にいて、ずずいと顔を近づけていた。突然の接近にカッと顔が熱くなる。彼女は目をまん丸にして、サトルの答えを待っていた。興味津々のアズールブルー。気圧されて、名を口にする。

「江里口サトル……」

「エリグチ？ エリ、グチ？ えっホントに？ すごい！
ねえエリ君って呼んでいい？」

「いや、あの……」

「エリ君って呼ぶね！」

たぶん、聴力に問題はないのだろう。人の話を聞いていないというのは、あるにせよ。そう、つまり、残念なことに、彼女のおかしい点は耳じゃなくて頭だ。絶対そうだ。間違いない。

「エリ君はここで何してるんですか？ ん？ 折り紙？
鶴？ すごーい！ いっぱいありますね！ わあ、こっちも全部？ 千羽鶴ってやつ？」

感心のアプリコットオレンジと、賞賛のクリーム色。くるくる変わる彼女の心の色を見ると、それほど悪い気はしなかった。ちよつと頭がおかしいとしても、嫌な人間ではないのだろう。そう思ってしまったから、騒がしくても追いつけそうとは思わなかったし、そうしたら一之江ルリは放課後毎日美術室に来るようになった。

「ねえエリ君」

一之江の間の抜けた声が聞こえる。

「エリ君はく夏という言葉でく何を思い浮かべますか？」

「……暑い」

「それだけ？」

「充分だろ」

「えーっ、もうちよつとこう……、プールとか、海とか、

ないんですかあ？」

「そんなん思い浮かべてどうすんだ」

「想像してくださいよ、白い砂浜、青い海！」

「はあ」

「波打ち際で追いかけて、キャハハウフフ、待つて待つて

て、ですよ。そういうの憧れませんか？」

「ませんけど？」

「うーん、淡泊だなあ……」

馬鹿みたいにしやべり続けている間も、一之江は作業の手は止めていない。サトルが折つて、その後ゴミ袋に突っ込まれていただけの鶴を、色によつて分けて、並べて、糸を通して、つなげている。ただの折り鶴だったそれらが、つなげると千羽鶴らしくなる。がさつそうに見える一之江は意外にも器用だし几帳面だった。

（黙ってれば、きれいなのに）

ふと挟まれた沈黙の間に、一之江の横顔に見とれていた。お団子にまとめられた髪は、下ろせばきつと長いのだろう。前髪の間から覗くおでこ。すつと通つた鼻筋。糸と針に落とされた視線、まつげは長くて……。

くりつと振り向く一之江。

「エリ君、どうしたんです？ 手が止まっていますよ！」

「あ、ああ……」

手元へと目を向ける。一之江は気づいただろうか、サトルが一之江に見とれていたことを。そう思うと、頬が熱い気がした。

「それで、海なんですけどね」

一之江の話題は途切れていたところへ戻っていく。

「今年の夏は、海に行つてみたいなあつて」

「……行けばいいじゃないか」

「そうじゃなくて、エリ君一緒に行きませんかつてことですよ」

「はっ？」

驚いて、思わず手の中の折り紙をつぶしてしまった。慌ててしわを伸ばす。

「なんで……俺なの？」

「なんでつて？」

「そういうのは……」

恋人と行けばいいじゃないか、と言おうとして、詰まつてしまう。一之江に恋人がいるとは思えない。放課後毎日美術室に入り浸つているし。そもそも恋人がいるならこんな話をサトルに持ちかけないだろう。そうは思うが、もしかしたら恋人くらいいるのかも知れない。だつて黙つてい

ればきれいなんだし。いやいや、そういう話ではない。恋人の有無はこの際関係ない。一緒に海に行く相手は友人だつていいはずだし、ならば言うべきことはこうだ。

「他に誘うやついるだろ」

「うーん……、いないですね。私、びっくりするほど友達がいらないんです。四月に転校してきたばかりだし。こんな風にしゃべれるの、エリ君くらいなんですよ」

一之江は四月に転校してきたのか。しかしもう六月だ。クラスに友達くらい出来てもいい時期だ。まさか引つ込み思案とでもいうのか。この遠慮のない一之江が？

「友達作れよ……」

↓↓↓つづきは

《おねシヨタ》アンソロジー『Over the City』で！